

明治大学外国人研究者招聘制度 報告書

<招聘教授・研究員の情報 / Guest Professor・Guest Scholar>

氏 名	Guillaume MULLER
Name	
所属機関(派遣元)	Université Bordeaux Montaigne ボルドーモンテーニュ大学
Affiliation (Home Organization)	
現在の職名	准教授
Position	
研究期間	6月17日から8月27日まで
Period of Stay	
専攻	20世紀日本文学
Field of Research	
ホスト教員氏名と所属学部研究科等	根本美作子・文学部
Name of host teacher and affiliation at Meiji University	

<外国人研究者からの報告 / Foreign Researcher Report>

①研究課題 / Research Theme
プロレタリア文学と日本帝国
②研究概要 / Outline of Research
本研究は、1920年代から1930年代にかけて、日本帝国の植民地（台湾、朝鮮、満州など）で生まれたプロレタリア文学が、どのように日本本土の文学界に受容されていたかを考察するものである。 20世紀前半、日本帝国は台湾や朝鮮などを植民地として支配したが、そのなかで、1920年代以降、国際主義的な左翼運動を背景にしたプロレタリア文学が本土日本で盛んになり、間もなく植民地にも波及した。プロレタリア文学のネットワークは、植民地文学を本土へと紹介する重要な役割を果たし、本土のプロレタリア雑誌には植民地作家の小説が少しでも掲載されるようになった。植民地作家は、本土における承認を求めつつ、植民地の視点から帝国の現実を描き出そうとしたが、同時に本土作家と対等な立場に立つことは難しく、その立ち位置は周縁的であった。このことは、反植民地主義を掲げるプロレタリア文学運動そのものが、皮肉にも植民地主義的な力学を反映していたことを示していると言えるだろう。 1922年創刊の『種蒔く人』から、1937年に検閲により廃刊となった『文学案内』までのプロレタリア雑誌は、植民地のプロレタリア作家が作品を発表し、本土の文学者から批評を受ける重要な場であった。具体的には、これらの雑誌に現れた批評を分析しながら、植民地出身の重要作家を特定し、彼らが本土文学界でどのように評価され、何を期待され、どのようにそれに対応していたかを明らかにする。こうした作業を通じて、日本のプロレタリア文学運動における植民地文学の位置づけを解明することが、本研究の目的である。
③招聘期間中の研究活動の実績 / The research results as Guest Professor・Guest Scholar
私の研究の大半は、1920年代から1930年代にかけて刊行されたプロレタリア雑誌を収集・調査するため、図書館での作業に費やされた。主に受入れ先である明治大学の三つの図書館（7月は泉図書館、8月は生田図書館および中央図書館）と国立国会図書館を利用し、稀少な雑誌を含む幅広い資料の閲覧に成功した。1921年創刊の『種蒔く人』から、運動の最終期にあたる『文学案内』や『日本評論』まで、日本本土のプロレタリア雑誌において、植民地文学がどのように紹介され、批評されていたかを追跡した。現在、その成果をもとに、『Ebisu』というフランス語の研究雑誌のために、プロレタリア文学批評の成立を分析する論文を執筆している。また、エスペラントとプロレタリア文学をテーマにした論文の執筆も検討している。 また、受入れ教員である明治大学の根本美作子教授の支援のもと、大学院生向けのセミナーや、所属する研究者の前で研究成果を発表する機会を複数回得た。特に、根本教授が主催する「戦後研究会」では、谷口麻子氏、竹内栄美子氏、新元史斉氏、高桑和巳氏、岡本和子氏と交流する機会を得た。私は7月12日と8月6日に開催されたこの研究会に参加し、自分の研究を発表した。特に日本プロレタリア文学研究の専門家である竹内栄美子氏との意見交換は非常に有意義であり、貴重なフィードバックや示唆を得ることができた。

